

# 第8回「日本語大賞」

テーマ「あまり使いたくない日本語・もっと使いたい日本語」

一般の部 文部科学大臣賞 受賞作品

お静かなお日和

神奈川県  
渡辺 恵子

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

「お静かなお盆でおめでとうございます」

と母は近所の人に会うたびに、そう挨拶を交わしていた。

私と妹は、この日のために仕立ててもらった水玉模様のお揃いの浴衣に、赤や黄色、水色のふわふわした絞り柄の三尺帯を結んでもらい、赤い鼻緒の下駄をカタカタならしながら、挨拶する母を待っていた。

白地に薄紫の撫子模様の浴衣に、半幅の縞柄帯を矢の字に締めた母は、いつもの野良着姿より、ずっと綺麗だった。

定紋入りの提灯をさげた父は、祖母を伴い一足さきに寺に盆の挨拶に行く。

涼風が深緑の絨毯を敷き詰めたような干瓢畑をふきぬけ、私の持った赤い盆提灯をかすかに揺らして通り過ぎて行った。

これは、私はまだ七歳くらいの田舎の迎え盆の思い出である。

私は関東の「べいべい詞」と広辞苑にも載っているくらい田舎言葉の多い、栃木県に生まれ育った。

しかし、田舎言葉のなかにも、なんとも懐ゆかしい言葉がある。

それは母たちが折々に使っていた「お静かな○○でおめでとうございます」である。なにもご丁寧に「お」を付けなくても、

「静かな○○でおめでとうございます」でも、よさそうなものだが、あえて語頭に「お」を付けて挨拶を交わしている。

抜けるような青空。 降りしきる蝉の声。

祭り半纏に豆絞りのねじり鉢巻き、笛や太鼓に合わせ、小鼓を打ち鳴らす男たちの長い列。そのなかには愉快そうな父の笑顔も見え隠れする。

この、賑やかな祭り囃子に先導され、

真っ白な鯉口シャツ、紺の腹掛け、股引に白足袋。頭にはきりりと手拭いの鉢巻き姿で神輿を担ぐ若い衆。

ワッショイ ワッショイの掛け声。 シャン シャン シャンと鳴り響く神輿の鈴の音に祭り景気が沸騰する。

ひととき甲高い先達の声を合図に、うおっ!! と、掛け声もろとも神輿を高々と担ぎあげる若い衆の熱気が渦巻く。

わぁー と、どよめく観衆。

『あばれ神輿!』と異名があった神輿が村じゅうを練り歩く。

薦被りの振る舞い酒に、浮かれ踊る男たちの赤銅色の笑顔と歌声。

家々の軒先で振る舞われる、黄色い炭酸饅頭、稲荷ずし、あべかわ餅、とうもろこし、西瓜、駄菓子や、アイスクャンデーを頬張る子供たちは、嬉しげにキヤツキヤツと騒ぎまわる。

むせかえる暑気。甘たるとい食べ物匂い、大人も子供も汗みどろになって、この夏祭りを

満喫している。まさに、村じゅう総出の夏祭り。

しかし、この喧騒のなかで、母や祖母は会う人ごとに、

「お静かなお祭りでおめでとうございます」

と普段の、ぞんざいな口調とはまるで別人のように、改まった挨拶を交わし夏祭りを祝い、喜びあっていた。

あれから数年後、小学六年生になった私は、母と並んで夏祭りを見物していた。

笛や太鼓、鼓の音、神輿の鈴の音、ワッショイ ワッショイの掛け声、子供たちが走りまわる騒々しさも以前とにも変わっていない。

そして、例の「お静かな」も健在であった。

この、「お静かな」は、盆や祭りに限ったことではない。

正月は勿論、桃の節句、端午の節句、春秋の彼岸、七夕祭り、夏祭り、秋祭り、大晦日、など四季折々の祝いや行事の日に使われていた。

しかし、会話もかき消される祭りの賑わいのなかで、「お静かなお祭りで」と、挨拶を交わす母たちが、私には不思議であり滑稽に見えた。

こんな複雑な気持ちのまま私は母と並んで家路に向かった。

駄菓子屋の店先を通りかかると、このおばさんが、かんたん服の裾を団扇でパタパタ扇ぎながら立っている。私たち母娘に気づいたおばさんは団扇の手を止め、満面の笑みを浮かべながら、

「お静かなお祭りでおめでとうございます」

と丁寧に頭をさげた。母も、

「本当に、お静かなお祭りでおめでとうございます」

とにこやかに挨拶を返した。

私も母にならって頭をさげた。

祭り囃子が蝉の声と競うように遠く近く聞こえる。

私はなお一層、「お静かな」の挨拶が気になってしかたがなかった。

そこで私は母にたずねた。

「どうして、賑やかな祭りの最中に『お静かなお祭りでおめでとうございます』と挨拶するの？」

と素直に母に訊いてみた。

すると母は、驚いたような顔つきで、

「ああ…… よく気がついたね。たしかに、賑やかな祭りの日に『お静かな』は可笑しく聞こえるだろうねえ」

と額の汗を拭きながら、ゆっくり話し始めた。

「すこし、ややこしいかも知れないが『お静かな』は、ただ静かという意味だけでなく、『穏やかで静かな日和』という意味だよ。たとえば今日のように祭りにふさわしい晴天に恵まれた、自然への感謝と敬いの思いも込められているんだよ。そして村じゅうこぞって和やかに、お祭りを開催できる幸せも含んだ大切な言葉なんだよ」と私の目を見つめ確かめるように話した。

だまって、うなづく私に、母はなおつづけた。

『静か』という言葉は字引に載っているだろうが、複雑な意味合いを持った『お静か』という言葉は、たぶん字引にも載っていないと思うよ」

といつになく真剣な眼差しで、説明する母の横顔を私はじつと見守った。

そして、母は昔を懐かしむように、

「この言葉は、母さんが、ここに嫁いだ時にお祖母ちゃん（姑）から、教わったんだよ。こんどは、母さんから恵子にバトンタッチだね。この言葉の意味合いを理解できる日がきつとくるよ。その時まで心のなかに大切にしまっておきなさいね」と諭すように微笑んだ。

夏祭りの日に字引には載っていない「お静かな」の意味を知った私は、少し大人になった気持ちと、今までになく真剣に説明してくれた母に尊敬の思いを深くした。

私が育った所は、見渡すかぎりの田園地帯で、ほとんどが農業を営み、自然の恩恵を受け、作物を収穫し生計をたてていた。

しかし、夏の干ばつ、洪水、台風などは、米穀類や干瓢、野菜、果物の収穫、家畜の飼料などにも大きな被害を及ぼした。

こうした、抗い難い大自然と共生する農民にとって、四季折々の行事を「お静かなお日和」に、滞りなく行えることは、このうえもない喜びだったに違いない。

現代の私たちは、日々あらたなる科学技術の進歩により、自然の恩恵や脅威に対し無頓着になっていないだろうか。

このような折に、ふとあの祭りの帰り道で、母が教えてくれた懐かしい言葉を思い出す。

明治生まれの母が教えてくれた「お静かなお日和」は、古ぼけた言葉だけれど、自然に対する感謝の気持ちを表現するに、ふさわしい言葉ではなからうかと。

明日の「お静かなお日和」を願って……。